

一人一人にあるこせい

小 四

わたしは、クラスの友達にくらべて、とてもせが低いです。ほいく所に通っていたころから、せの順でならぶ時は、いつも一番前です。げんいんを調べるために、けんさ入院をしたこともありました。クラスで一番せの高い友達のことを見て、うらやましいなと残念な気持ちになったこともありました。けれど、せが低いことは、「わたしのこせいなのだ。」と、自信をもって思える出来事がありました。

二年生のころのことでした。入学したばかりの一年生に、

「あの子小さいよね。」

「うん。ちびだよね。わたしより年上なのに。」

と、ひそひそと言われました。本人たちは悪気なく言っていたようですが、わたしの心は、とてもきずつきました。それからわたしは、「どうしてわたしは、友達よりもせが低いのだろう。どうして年下の学年の子なのに、わたしよりもせが高い子がたくさんいるのだろう。どうして。」と、考えるようになりました。でもいくら考えても答えは出ませんでした。たくさんごはんを食べなくても、苦手な野菜を食べても、なかなか大きくなれませんでした。

次の年、まだいやな気持ちが続いていました。他の学年の人にろうかです

れちがったときも、

「すごく小さいね。」

と、わざわざ振り返って言われました。

習い事では、他の学校の男子に、

「ちび、ちび、ちびだ。」

と、何回も言われました。また言われるのではないかと不安になって、

「もう学校に行きたくない。」

と、泣いたことがあります。どうしてわたしはせが低いのだろう。答えが出ないことを考えるのは、とても苦しくて、とても大変でした。考えても考えても、やっぱり答えが出なかったの、お母さんに相談することになりました。お母さんは、少し考えてからわたしに教えてくれました。

「それはね。あなたの体が、あなたに

はその大きさが合っていると思っ
決めてくれているの。他の子にくら
べたら小さいかもしれないけれど、
あなたにはその大きさがちょうどい
いってはんたんしているのだと思う
よ。あなたはあなただから、大きく
なるときがきたら、そのときにちや
んと大きくなれるのだからだいじよ
うぶだよ。今のあなたが大好きよ。」
わたしは、はっとしました。なんだ
か心の中の氷がとけたような、すうつ
とした気持ちになりました。もつと早
く相談すればよかったと、少しこうか
いもしました。

「今のわたしにはこの大きさがちよ
うどいい。」お母さんに教わった言葉を、
何度も心の中で言ってみました。くり

返しているうちに、なんだかうれしくなってきました。いろいろなことをどんどん思い出してきました。こんざつしているときに、下の方の少しのすき間を通りぬけ、行きたい場所にスムーズに着くことができてうれしかったこと、クラスでならんでいるときに、いつも一番前なのでとても見やすいことなど、自分のせの低さでとくしたことやうれしかったことがたくさんあったことに初めて気付きました。これは、わたしのりっぱなこせいだと、自信をもつて思えるようになりました。せの低さが、いつの間にか気にならなくなつて、自然と笑顔で笑えるようになりました。

「一人一人にあるこせい」それは、

わたしがわたしであるそのものだと思います。いいことも不安なことも、すべてがそのままの自分なのだ、今は大きな声で言えます。せが低いことだからかう人がいても、もう悲しい気持ちで終わることはありません。お母さんの言葉を聞いて、勇気をもつことができました。

せが低いわたし。一番前にならぶわたし。どんなわたしも、大切なこせいです。だから、そのこせいを生かして、これからも楽しくすごしていきたいです。